VALUE SIGHT（バリューサイト）

おれたちの分校を残す 廃校舎を舞台に展開する 住民の集結と新しい

金山町北部の山あいにある総戸数36戸の谷口集落。ことさら景観に恵まれているわけでもないこの地区に、リピーター客を中心に年間１万６千人余りの人々が訪れる。集客の中心は廃校になった分校であり、感嘆すべきことだが、スタート時から運営にたずさわるスタッフに、気負いは感じられない…。

1996年３月、1887年（明治20年）の開校以来110年の歴史を地域と共に歩んできた金山小学校・谷口分校が廃校になった。

全国的な少子化の波は、金山町谷口集落にも例外なく押し寄せ、かつては50人近くいた在校生も、96年には10人ほどになっていた。分校の廃校は純粋に子どもたちの教育を考えた当時の若い親たちの決断であり、他の地区民も特に異論はなかった。

とはいえ、分校は単なる学びの場ではなく、地区の各種行事が行われる場所でもあり、住民にとって地域の象徴であり、心のよりどころでもあった。

廃校舎の利用について、地区住民の間で話し合いを重ねた結果、「老朽化も進んでおり、地区で維持するのは難しいから、取り壊しはやむを得ない」という結論に達したものの、できれば愛着ある校舎を残したいというのが多くの地区民にとっての本音だった。

町による分校の解体計画が進むなかで、地区外からも「この校舎は残すべきだ」と応援してくれる人がいて、たくさんの人からさまざまなヒントやアドバイスをいただいた。そして、都会人と地元の人が体験交流をするための学習施設「四季の学校･谷口」と、手打ちそば屋「がっこそば」の案が浮かんできた。

しかし、そば屋をやるといっても、地元の人たちでそばを打ったことのある人はいない。「学校は村から離れていて、国道からも遠い。こんな所に誰も来ないさ」という悲観的な声も聞こえた。谷口地区の住民や、役場･JAの職員など14名の有志で「谷口分校運営委員会」を組織して、対応を話し合った。校舎の維持費や地代を運営委員会が責任を負うということで町と交渉し、幸い校舎は町の協力により無償で借りることができた。土地の利用は有償賃借で契約。運営資金80万円は借金、賛助会費40万円で校舎の修繕改修に取り掛かった。また、東京の知人に頼んでそば打ちを５回ほど教えていただいた。そば屋の厨房は給食室を改修、体育館に畳を敷き、テーブルを並べてにわかそば屋に仕立て上げた。

こうして、「四季の学校」は1997年の６月に開校、７月には土、日曜日だけ営業するそば屋「がっこそば」をオープンしたのだった。

そば屋は地元の母ちゃんたち５名が担当。自家製の漬け物、納豆汁、山菜の炒めものなど母ちゃんたちの自前料理が、遠来のお客様から好評だった。一方、四季の学校は春夏秋冬それぞれ一泊二日登校で仙台や都心部からお客様を招き、地元の父ちゃんたちが「せんせい」となり、校舎の修繕や、グランドの草刈りなどを一緒にやる。田植えや山菜採りなどの体験もある。毎回、夜の交流会は大いに盛り上がり、ここでも母ちゃんたちの出番である。

こうしてなんとか活動を始めたものの、当時私たちの知る範囲では他にまったく例のない新しい試みであり、はっきりとした将来見通しや採算性のめどなどもなく、一年続けられるか、本当にこの活動を定着させられるかどうかまったく自信のない、いちかばちかのスタートだった。

あれから10年、2006年11月には10周年記念イベントを行えるまでになった。開校当時は予想もできなかったうれしい出会いや感動があり、「四季の学校」は40回を数え、リピーターも多く、これが縁で５組のカップルが誕生した。そのうちの１人（仙台出身の女性）は、金山町に嫁いできて今はがっこそばで活躍している。また、当初から参加していた子どもたちは、今では私の身長を超すほどの成長を見せている。一日のそば屋の来客数が200人を超すことも珍しくなくなり、校舎の活用や地域活動の参考にと視察の団体も多く、大型バスの乗り入れも年間かなりの台数に上る。おかげで途中の町道のＴ字路を拡幅していただき、古かった学校は少しずつだがかなりの部分が新しくなった。

このような旧谷口分校の変貌ぶりを、私はうれしい気持ちを込めて、「20世紀最後の奇跡」と言いたい

くらいだ。活動を始めたのはまさに20世紀の終わりの時期であったが、この奇跡を起こしたのは決して一人や少数の力ではない。分校の卒業生や地区住民だけでもない。地区外の人たちの協力や支援があったからこそである。私はいつも、そこに人と人とのつながりを感じ、感謝の気持ちを忘れることができない。

“地域人”ということばを時折目にするが、都会においては地域というものはあまりにも大きすぎて、一人や少数の運動など取るに足らない、何の力にもならない場合が多いと思う。しかし、田舎の町や村

最上 そうされる出会い

NPO法人四季の学校・谷口
理事長
庄司　博司

においては、一人や少数の運動でも村や地域、町を巻き込んだ運動に発展させられるケースも多い。

また、若いうちは、結婚や子育てや学校関係などの個人的な関心事が集中し、地域の事に気持ちが向かないのはやむを得ないとしても、40代～50代のある程度の年齢になったら、自分たちがこの地域の未来をつくっていくというくらいの気持ちがなければ地方に住む“地域人”としては十分ではないのではないかと思う。そのくらいの自覚を持って頑張っていきたいものである。

時代が進み文明が進化し、都市が発達してきたが、都市化すればするほど本来人間の持っている自然回帰願望のようなものが呼びさまされて、つかの間の自然、田舎を楽しみに来るのがグリーンツーリズムのゆえんではないかと思う。都会の居住環境を見れば、その気持ちが理解できるような気がする。今こそ自信を持って、農山村、田舎の快適性を発信、アピールしていくべき時だろうと思う。

四季の学校に参加した仲間と地元のスタッフたち

私たちは、分校だった時に多くの教育熱心な先生方との出会いがあり、自分が子供だった時も、PTAとして子育てや地区活動に参加するようになってからも、たくさんのいい思い出を作ってきた。分校と共に過ごした“幸せな時代があり、そのことを忘れないで大事にしたい”という気持ちが分校を残し、その活用に踏み切らせ、今の思いがけないうれしい出会いや感動、幸せにつながっているのだと思う。これも教育の大きな力ではないだろうか。

この活動を10年間続けてこれたのは、母校への愛着、それに加えて地区外の人たちの協力があり、スタッフとして集まってきてくれた地区の元気な母ちゃんたち、行政や町民の皆さんの支援、これらのすべてがうまくかみ合った、極めてラッキーなケースだと思えてならない。

もう10年、まだ10年と、見方・考え方はさまざまだが、多くの方々との交流を図りながら地域に愛され、「地域の象徴」「地域の誇り」となるような学校を目指して、これからも活動を続けていきたい。

■ **庄司　博司**（しょうじ・ひろし）

NPO法人四季の学校・谷口理事長。
1947年、金山町生まれ。
金山町社会教育委員。
山形県ふるさと保全指導員、山形県指導農業士。
〒999-5412　山形県最上郡金山町大字飛森1124
TEL 0233-52-7577